

TOKYO みどりマガジン

Vol. 1

特集1
東京の街中でみどりを探す!

特集2
東京の緑地・公園で
みどりに出会う!



イラスト：とうもりみき作
『TOKYO EARTH WORKERS collection 2012 クリエイティブ コンテスト・アート部門』グランプリ 受賞作品





巻頭言

木を見て、 森を見る。

「木を見て、森を見ず」という格言があります。細部（木）にとらわれてしまい、全体（森）を見失うことへの警鐘とするものです。ところが、細部について知らないままに全体だけを見ようとしても、漠然として捉えどころがありません。

ただ、「森を見る」にしても、「木を見ず、森を見る」になっってしまったのは本末転倒。求められるのは、「木を見て、森を見る」、そんな姿勢です。

かつて私たち日本人の暮らしのなかには、草木や昆虫などが身近にあつて、季節の移ろいのなかでその姿を愛でる文化がありました。ところが近年、都市化が進むにつれて木々や田畑が減っていき、暮らしのなかの自然もいつしか失われたものが多くなってきました。失われゆくものへの郷愁もあつてか、「みどり」に対する理解や共感が進んできていますが、どこか「森」だけを見ているところはないでしょうか。

都市空間の中にも、さまざまな「みどり」があります。公園緑地、街路樹、ビルの屋上や壁面緑化、田畑、河川敷



木と林、そして森。たくさんの命を育む舞台であり、人の暮らしを支える存在でしたが、今は少し遠い存在に。でもまた、その魅力を再発見する人が増えてきています。



雑木林を彩るヤマユリの花

や空き地の草地、民家の庭木……。これらは単に「みどり」というだけの存在ではなく、草木や昆虫をはじめとした生き物たちの生命の営みの場なのです。

夏にうるさいくらいの鳴き声を響かせるセミたち。ちょっと探せば、枝や葉にたくさんの抜け殻が見つかります。でも、そんなセミの幼虫が土から這い出してきて、何時間もかけて羽化していく姿を見たことがある人はそれほどいないかもしれません。あれだけうるさく鳴くセミたちだからこそ、羽化のシーンを目にするのも意外に簡単です。

秋に鳴く虫たちも、存外身近にすることに、多くの人は気づいていないかもしれません。ちょっとした植え込みや草地にそっと耳を傾けてみると、静かに鳴き交わす虫たちの音色がきつと聴こえてくるはずです。

いつもの目線の高さで、ただなんとなく目に入った光景をぼんやり見ているだけではなかなか見えてこない、自然そのものももっている美しさ、楽しさ、おもしろさ。意識するかしないか、それだけの違いで、見えてくるものや聴こえてくるものが、大きく違ってくるものです。

あなたも、TOKYOで「みどり」を感じる暮らしを始めてみませんか？

TOKYOみどりマガジン編集部

東京の
街中で

みどりを

探す！

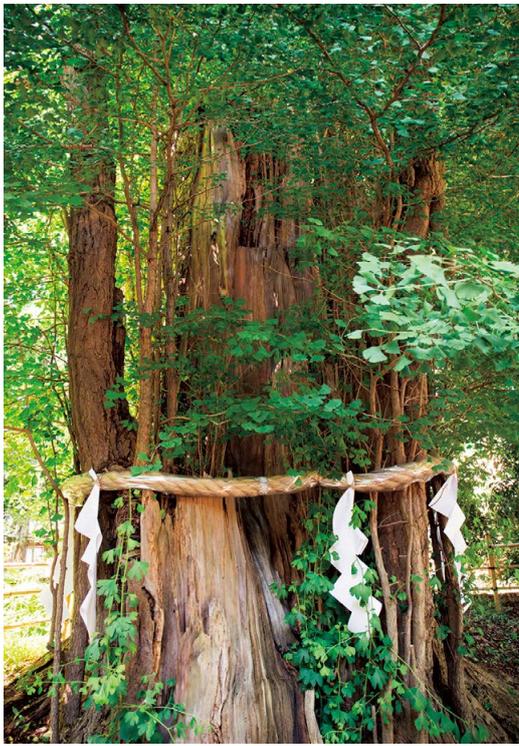
「マツプづくりで自然を感じる」

府中市

白地図を片手に街を歩き、目に留まった自然を描き込んでお手製の地図をつくる
「緑のマツプ」づくりという活動があります。
地域の緑の特徴を一つひとつ発見していくことで、
身近な緑の存在を喜び、大切に思う気持ちを広げていくきっかけにもなります。



道路際のケヤキを生かすようにつくられたフロック塀。自然を思う住民の思いが感じられます。



大イチョウの木

大國魂神社境内の立派なイチョウ。推定樹齢約1000年、幹回り約9.1メートル。巨樹が多いイチョウの中でも全国で33番目、都内では2番目の太さを誇ります。

梅雨の谷間の太陽がジリジリと照りつけるなか、府中の街を舞台に「緑のマツプ」づくりが行われました。

地元で市の自然環境調査員を務める大澤邦男さんと野口道夫さんにご案内いただき、日頃は板橋区で「緑のマツ

プ」づくりに取り組む「いたばしエコ活動推進協議会」の村上和生さん、鈴木和貴さん、黒澤秀行さん、そして板橋区で環境協働推進を担う佐々木千枝さんが参加しました。

京王線府中駅を降りて南へ向かうと、立派なケヤキが立ち並ぶ通りが大國魂神社おおくにたまに続いています。この並木は国の天然記念物にも指定され、起源は平安時代にまで遡るとか。神社正面の鳥居前にある大ケヤキをはじめ、立派な枝ぶりのイチョウやムクノキなど、「府中の名木百選」に指定された木々が境内に心地よい木陰をつくっています。

「緑のマツプ」づくりの基本は歩くこと。ゆっくりと心ゆ

くまで歩くことで、クルマはもちろん、自転車のスピードでさえ見過ごしてしまいがちな小さな自然にも気づくことができます。

生き物たちの息づかいのうち、圧倒的な音量で迫ってくるのはおなじみのミンミンゼミやアブラゼミですが、ふと立ち止まると、ケヤキの木を上へ上へと登っていくカマキリや、樹皮の凹凸に身を潜めるセアカツノカメムシなどの姿を見ることが出来ます。

歩く人の視点が
地図の個性をつくる

村上さんは、住宅街の細い路地に分け入って、家々の軒

先を植木鉢が飾っている様子に注目していました。

「地域の方の自然を思う気持ちが、こういうところにも現れるんですよ」

同じコースを歩いても、注目するポイントは人によって違います。板橋区での取り組みでも十人十色の地図ができあがるそう。地図をつくって身近な緑を知ることに加え、一緒に歩いた仲間同士で、地図を見ながら気づいたことや、地域の自然特性について語り合うことにも大きな意味があるといえます。

板橋から参加した3人の地図を見せてもらうと、通りがあった旧家の家紋がメモされ、町の歴史への思いが現れる地



歩きながら気になったことを白地図に書き込んでいきます。自分の感じたままに記すのがコツです。



軒先の小さな緑が道行く人の目を和ませます。大きな庭がなくても、緑のある暮らしは気持ちいい。



競走馬の供養のために建てられた「馬霊塔」を発見。墓石には往年の名馬の名が刻まれています。東京競馬場がある府中ならではの風景。



龍神社の湧水

東西約16キロの府中崖線に、市内でたった2カ所残る湧水のひとつ。フェンスに囲まれて採水できないのが残念。

樹液を吸うアカボシゴマダラ、カナブン、シロテンハナムグリ。アカボシゴマダラは外来種。



府中市南端を流れる多摩川がつくった河岸段丘の崖は「崖線(ハケ)」と呼ばれ、高さ6~7メートルの崖線沿いに多くの緑が残ります。写真の中央部分が崖線。

**住民の意識こそが
街の緑を守る**

図、崖線の緑を分断する大型駐車場がしつかり記録されたもの、木の名前が細かく記され、街歩きの良い目印になりそうな地図など、それぞれの視点の違いが現れていました。

街を歩き、できあがった地図を見て改めて気づくのは、街中の緑の多くが一般家庭や寺社などの私有地にあることです。そのため、住宅の建て替えや道路の拡張による変化が激しく、緑の様子は刻一刻と変わってしまいます。「だからこそ、地域に住む一人ひとりが、自然についていいなと思う気持ちを持つことで、

地域の自然が守られるのです」と板橋の鈴木さん。変化を記録する意味でも、継続的に街を歩き、マップづくりをすることで、定点観測になるといいます。

鈴木さんは続けて、「たとえば軒先の緑を守ってほしいと外部の人間が言っても説得力がありません。マップづくりを通して、足元の緑を大切に感じる人が少しでも増えてくれるといいですね」と期待します。

府中の大澤さんも、「自然の大切さを語れる人を増やすのが一番です」と語ってくれました。さあ、みなさんも身近な自然の息吹を感じに、マップづくりに出かけてみませんか？



一緒に「緑のマップづくり」を楽しんだ府中市と板橋区のみなさん。それぞれ個性的な地図ができました。

特集1

東京の
街中で丸の内丸の内で楽しむエコツアー

みどりを

探す！

千代田区

丸の内といえば、東京駅そばの巨大なオフィスビルが立ち並ぶエリアというイメージがあります。そんな丸の内でもホッとできるスポットが「丸の内さえずり館」。

「みどり」や自然に興味のある人が集う情報発信のベースとして、知る人ぞ知る場所です。

初夏のある日の午前中、丸の内界隈で行われたエコツアーで発見した「都心に棲む生き物」をご紹介します！

平日の午前10時。丸の内の

オフィス街にスーツ姿とはほ

ど遠いラフな姿の大人たちが

次々と集まってきました。

「おはようございます！」

さえずり館のスタッフ、深

須布美子さんの元気な声が響

きます。

ここ丸の内さえずり館は、

自然が好きな人なら一度は足

を運びたい場所。さまざまな

展示やセミナー、野外イベン

トが企画されていて、今日も

これから丸の内界隈のエコツ

アーが始まるのです。

丸の内に

優良物件あり！

生き物たちの

暮らしぶり

今日の案内役、奇正彦さんからさっそく、解説開始。

「銀座でミツバチを飼っている話を聞いたことがある人は多いと思いますが、丸の内界隈でもオフィスビルをつなぐ道沿いに街路樹が植えられていますし、皇居や日比谷公園も近いことから、意外なほどたくさんさんの生き物たちが息づいています」

聞けば、昆虫だけで84種類、植物で170種、鳥は42種類もいるというから驚きです。まずはビルを出てすぐに、

最初の生き物が登場です。

「これはアカカタバミ。コンクリートの隙間にも生えるタフな植物です。これを利用する虫もいて、今朝もヤマトシジミという小さなチョウが産卵していました。幼虫がこの葉っぱを食べるのですが、葉にシュウ酸が含まれていて酸っぱい。他の虫はあまりこの植物を利用しないらしく、ヤマトシジミが独占しているようです」

次に出会ったのは黒いガ。その名は「ホタルガ」です。「道路沿いの植え込みに利用されているハマヒサカキを食草としているガです。海辺の植物で乾燥にも強いので、よく植えられています」



東京駅近くでもエコツアーができるという意外性がおもしろい。なにより、こんな都会でサバイバルしている生き物たちのたくましさには感心させられます。



丸の内さえずり館

さえずり館はまさに都心のオアシス。足しげく通う人も多しとのこと。



都会の片隅に生きるホタルガ(ホタルのようですがガの仲間)は植え込みに使われているハマヒサカキを食草として利用しています。セグロアシナガバチもハマヒサカキでなにやらお取り込み中ですが、なにをしているのでしょうか？



アカカタバミは都会のコンクリートジャングルでしぶとく生き抜いていました。



都心の一角にある日比谷公園は、まさに生き物のオアシス。なかでも心字池周辺は特に生き物が多いので、自然観察には最適です。



シジュウカラのための巣箱が三菱一号館美術館脇に設置されていました。スズメと棲み分けられるように配慮された「優良物件」です。



見ればアベリアの花にキムネクマバチが!



アオサギは大型の鳥類で翼を広げると1.6メートルにもなります。心字池で魚やカエルを待ち伏せしていました。



日比谷公園のボタンクサギの花にはハラビロカマキリが潜んでいました。ハンターの狙いはもちろん他の昆虫ですが、その成果やいかに?

それを目ざとく見つけて利用する虫のたくましさには、心底感心させられます。

三菱一号館美術館の中庭に浅い水場があり、スズメやシジュウカラが利用しています。

「この巣箱の穴の直径は2・8ミリ。これならスズメにはちよつと小さくてシジュウカラにはちようどいい」

シジュウカラは枝からぶら下がったり垂直の幹に止まるので、スズメが探せない虫を見つけれられるそうです。

都心のオアシス 日比谷公園の 生き物たち

東京會館前を抜けて日比谷公園に入ると、案内役は佐藤真人さんに交代です。

「花と昆虫の共進化は4億年の歴史があります。美しい花は昆虫のために咲きますが、虫は植物の花や葉、幹、枝を上手に利用しています」

公園の入り口でさつそくレクチャーが始まります。

「ボタンクサギの花では、ハチや小型のチョウなど、花を訪れる昆虫を狙うハラビロカマキリが花影に潜んでいます。またキムネクマバチは花の蜜を吸うとき、正面から蜜を吸って花粉を運ぶのではなく、花の横に穴をあけて蜜だけ吸う『盗蜜』をします。このようにボタンクサギひとつ見ても、いろいろな昆虫が関わっています」

日比谷公園にはムラサキカタバミ、ウラジロチコグサ、アメリカフウロなど、海外からの移入種も多いとか。

「これらはみな乾燥に強いと

いう特徴があります。都会の公園や道端で増えているのはそのためです」

最後に佐藤さんが紹介してくれたのは、松本楼近くのアメリカハナミズギの葉裏に潜む、ある昆虫でした。

「エサキモンキツノカメムシは子育てする珍しい昆虫です。よくご覧下さい」

自然のなかで生き物の息吹を発見するのは難しいもの。でも、案内さえあれば意外なほどたくさん生き物が発見できる! そんな驚き続きの半日歩きでした。



今回のエコツアーを企画・運営された3人。左から、さえずり館の深須布美子さん、佐藤真人さん、奇二正彦さん。お世話になりました!



エサキモンキツノカメムシはメスが卵や孵ったばかりの幼虫を守るのが特徴です。よく見るとけっこうかわいい。

特集1

東京の
街中で

みどりを

探す！

「もつと気軽に農業体験」

国立市

自家栽培やベランダ園芸が人気の昨今ですが、道具の準備や、ちよつとしたノウハウも必要です。関心はあっても、少し敷居が高いと感じる人も多いのではないのでしょうか。会員制農場「コミュニティファーム」なら、手ぶらで気軽に参加できます。



ヒツジとヤギがお出迎え。子どもたちのアイドルの存在です。



くにたち はたけんぼ

ここは個人に区画を貸し出す市民農園とは異なり、団体会員がグループとして畑を借りて利用しています。「畑を媒介にしたコミュニティをつくり出そう」というのが「くにたち はたけんぼ」のめざすところ。



水路の水音が心地よい。

JR南武線の谷保駅から徒歩十数分。住宅街を抜けると、見晴らしのいい農地が現れます。向こうには国道があるらしく、ビデオチェーン店の看板も見えるなか、用水路を流れる水音とともにカエルの鳴き声のどかに響いています。そんな心落ち着く場所に「くにたち はたけんぼ」はありました。

「メーエエ……」とヤギのハクがお出迎え。ヒツジもせっせと草を食べています。

東京で農業を！
新しい形を模索

そう広くはない農地ですが、田んぼには青々と苗が植えられ、畑にはジャガイモやトマト、スイカなどが育っています。農地のすぐそばには休憩所があるのが嬉しい。「国立市民だけでなく、わざわざ墨田区から来ている人もいます」と「はたけんぼ」の主宰者、すがいまゆみさん。ここはどうやって管理と運営がされているのですか？

農園の会を立ち上げたことが始まりです。新しく農業にチャレンジしたい人、代々続いてきた農地を代替わりで見直している人、農地という心地よい空間を残してほしいと願っている人など、さまざまな立場の市民が、子どもたちに農地を受け継ぐという目的で知恵を出し合っています。

「はたけんぼ」という名前は、畑+田んぼ+はけ（崖線）から。日々の暮らしのなかに田んぼや畑があれば、休日をゆつたり過ごしたり、収穫の喜びを味わったり、大人も子どもも友達と出会う場になります。「はたけんぼ」は、そんな願いを形にする新しい形の



田んぼで捕まえたトウキョウダルマガエル。いい声で鳴いてくれました。



ザリガニ捕まえた！

農園なのだそうです。

芋掘り大会

この日のイベントはジャガイモ掘り&収穫祭。主催は「森のようちえん 谷保のそらっこ」という地域の子育て支援団体です。集まってきたのは3歳までの子どもたちとお



取れたてのジャガイモに、思わずパクリ!



続いてトマトを収穫。きれいに色付いて、おいしそう!



トマトの甘さにビックリです。



今日の収穫

この後、参加した一人ひとりに配られたのでした。



ジャガイモ掘り&収穫祭

お母さんと一緒に引っ張ってみると、ジャガイモがたくさん取れた! 次々とつながる芋の様子に、どの子も驚きの声を上げていました。



こんなにたくさん付いてたよ!



収穫後のお芋ランチには、取れたてのミントティーも出てきて、お母さん同士の話も弾みます。田んぼの上を渡る風が気持ちいい。



アツアツおイモはおいしいな〜。

母さんたちで、さっそくカエルやザリガニを捕まえて大盛り上がり!

畑に移動すると、そこにはさまざまな野菜が所狭しと植えられています。ジャガイモはもちろんだ、ナス、シソ、カボチャ、ルッコラと緑のオンパレードが目によさしい。

「ツルを引っ張ってごらん」子どもたちはお母さんに促されて、ジャガイモの茎に取り付けます。一緒に引っ張ると、豊かに実ったジャガイモがコロコロと土の中から現れました。子どもたちもその姿に興味津々。なかには、土が付いたままの芋にかぶりつく子どももいました。

芋掘りが一段落すると、トマトをもいだり、ニガウリを取ったりして、休憩所に戻ります。畑で取れたてのミントティーを飲みながら、芋が蒸かしあがるのを待ちます。その間に、どうしてこの「はたけんぼ」に参加したのかお母さんたちに聞いてみました。

「子どもに土遊びをさせたくて年会員になりました。国立でも舗装されているところが



「お気に入りの場所としての田畑があれば休日の過ごし方が変わるはず」と、すがいさん。

多いので」

「ここは安心して遊ばせられます。雑草があつて生き物がいるような、なんてことない空き地が近くにないんです」

ジャガイモが蒸かしあがる頃、親子で楽しめる紙芝居が始まりました。どの子も口いっぱいに熱々の芋をほおぼりながら、目は紙芝居に釘付けです。

楽しいお昼ご飯が終わっても、みんな、なかなか帰ろうとしません。

「お母さんたちの子育て相談の場にもなっているようです」と「谷保のそらっこ」を主宰する佐藤有里さん。

農地は生産の場であり、経済活動の場でもありますが、「居場所」を提供したり、子どもと大人の農業との出会いの場、トンボやカエル、ザリガニとの出会いの場だったり、たくさんさんの役割がこの都市の農地にはありそうです。

東京の
緑地・

公園で

みどりに

出会う！

三鷹市

「公園でセミの羽化を観察する」

夏休みに入ってすぐの土曜日夜、都立野川公園でセミの羽化観察会が開かれました。

東京都の西部に位置する野川公園は、湧水がつくる水辺や雑木林、草原など変化に富む自然が残り、豊かな樹林に囲まれた園内では、6月から9月にかけて、たくさんさんのセミが羽化します。

セミの不思議な生態に迫りました。



都立野川公園は、多摩川が武蔵野台地を削ってきた国分寺崖線を背景に、崖線から出る湧水がつくる水辺、雑木林、草原など変化に富んだ環境のなかにあり、樹木や野草、鳥や昆虫など四季折々の自然を楽しむことができます。



マテバシイの葉に残されたアブラゼミの抜け殻。アブラゼミの抜け殻は比較的高い位置に多く見られます。



ケヤキの木の根元、高さ50センチくらいのところに残されたニイニイゼミの抜け殻。泥をかぶっています。

観察会の日、集合時間の午後6時になると、親子連れが次々と集まってきました。夜の昆虫観察は初めてなのか、みな表情が硬く、緊張がうかがえます。

暗くなるのを待つ間、部屋の中で村松利文所長とパークレンジャーの山田陽子さんを囲み、セミの種類や生態について学びました。

お話では、世界中のセミは1500種類、日本には36種類、野川公園では6種がいて、6月中旬にニイニイゼミが鳴き始め、ヒグラシ、アブラゼミ、ミンミンゼミ、クマゼミ、ツクツクボウシと順に現れるそうです。

都心に近い公園で6種類の

セミが見られるのは多いほう。セミの幼虫は湿った場所から乾いた場所までいろいろなところに生息しますが、都会は林が減り、アスファルトが増えたりして、生息できる場所が少なくなっています。

卵は枯れた枝などに産みつけられ、幼虫になると地中に潜ります。地中では木の根から水分を吸っていますが、養分の乏しい水を餌にしているため、種類によっては成虫になるまでに5〜6年といわれています。

セミの一生を学んだ後は、6種類の抜け殻を見分けるクイズに挑戦。セミの抜け殻は色や大きさ、触角の形などで種類を見分けられます。



サービスセンターの標本箱

上からニイニイゼミ、アブラゼミ、ミンミンゼミ、ツクツクボウシ、ヒグラシ。

夜の公園で
魅せられて

暗くなり始めた7時頃から、いよいよ外に出て羽化の観察です。

センターを出てすぐ、目と鼻の先にあるマツの木でアブラゼミの幼虫を発見。府中や三鷹、調布などから来た参加



観察会が始まる前に、セミについてレクチャーを受けました。世界一大きいセミに子どもたちは興味津々。パークレンジャーの山田さんが左手に持っているのが世界一大きいテイオウゼミ(体長6〜7センチ)、所長の村松さんが持っているのがクマゼミ(体長5センチ)。

者のほとんどが、動いている幼虫を見るのは初めて。大人

ニイニゼミの脱皮



①幼虫の動きが止まり、しばらくすると背中が割れて、中から成虫が顔を出します。②お腹が半分ほど外に出たら、脚が固まるまでじっとしています。③何度も屈伸して体を起こし、殻にしがみつきます。小さくたたまった羽が見えます。④殻にしがみついたらお腹を全部出し、羽が伸びて乾くのを待ちます。翌朝までのこの時間が、いちばん天敵に襲われやすいのです。



初めて見るセミ脱皮の瞬間

前脚で殻にしがみついたために、小さな体で何度も腹筋を繰り返す。セミも命懸けです。



羽化し終えたばかりのアブラゼミ。青みがかった白い羽をつけた姿を見て、府中から参加したという母娘は「真っ白、きれい」「妖精みたい」と、ため息まじりにつぶやいていました。



観察を始めてすぐ、マツの木で幹をよじ登りはじめたアブラゼミの幼虫を発見！ほとんどの参加者が、羽化はもちろん、幼虫が動いているのを見るのも初めてということで、みな、息をのんで見つめていました。

も子どもも、「すごい！すごい！」と夢中です。やがてあちこちに散らばって、思い思いに観察が始まりました。4、5メートル離れたケヤ

観察会の最後、所長の村松さんが「見せたいものがある」と参加者を連れていったのは、一本のサクラの木の根元。そこには、何かの原因で羽化に失敗して殻から出られないまま死んでしまったセミの幼虫が止まっていました。すでにたくさんのアリが集まっています。「さっき、誰かが『羽化は命懸けのことなんだ』って言うていたけれど、本当にそうなんです。命懸けで大人になるうとしてる。自然は厳しい。

身近な自然を見て感じること

キの木ではニイニゼミが脱皮を始めていました。羽がまだ縮んでいたせいか、「なんだか気持ち悪い」と言っていた子どもたちも、息をのんで見入っています。ぶら下がった状態で10分ほど経つと、今度は殻につかまろうと屈伸を繰り返します。「すごい！生まれたてなのにすごい腹筋力だ！」と、驚きの声が上がります。



羽化に失敗してしまったセミの幼虫。所長の村松さんが見せてくれました。羽化はまさに命懸けです。



レンジャーミニ図鑑「セミのぬけがら」と本物を見比べ、真剣な表情で種類を当てた子どもたち。

解散後、家路をたどり暗い園内に散っていく参加者たち。「また来ような！」というお父さんの声がいっまでも耳に残りました。

ちよつとした間違いでこうして羽化に失敗して死んでしまうこともある。少し残酷なようだけれど、と前置きして見せてくれたのは、途中で触ると羽化に失敗してしまうこと。だから羽化が始まったなら触らないで、と伝えるためでした。自然は厳しい。だからこそ、人の心を打つのもかもしれません。観察会を終えた参加者からは最初の緊張が消え、瞳がキラキラと輝いているのが印象的でした。

東京の
緑地・

公園で

みどりに

出会う！

「森林レンジャーの里山再生」

あきる野市

市内の6割が森林という、あきる野市。

「森は子どもたちへの財産」。そう考える同市には、

全国の市町村では初めてとなる森林レンジャーがいます。

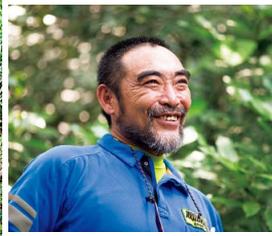
森と人、動物と人、昔の暮らしと今の暮らし。

そんな架け橋となるべく活動するレンジャーのみなさんと、あきる野市の取り組みとは。



環境政策課長の吉澤桂一さん。「地域のみなさまと連携しながら森を再生し、少しでもあきる野の自然、その魅力をお伝えできれば」。

森林レンジャー



「森は今が過渡期だと思います。森と人、動物と森、それぞれのよい関係とその道筋が見えたらと思います」。そう話すのは、「隊長」こと杉野二郎さん。



「大都会のそばにこれほど生物多様性のある森が広がっている。ぼくにあって、あきる野の森はジャングルです」。広く深く生き物を愛する、パプロ・アバリシオさん。

「うんこロジスト(!?)」の異名を持つ、加瀬澤恭子さん。「生き物の糞が媒体となって森が広がる……そんな、生命の連鎖を感じてもらえたら」。

「森は、あきる野市の財産です。将来を見据え、健やかな森を子どもたちの世代に引き継ぎたいと思っています」
そう話すのは、あきる野

市・環境政策課長の吉澤桂一さん。市内の森は古くから人々の生活と深く関わってきました。枝は払って薪に、下草は刈って飼料に。そうして人の手が入ることで森は保たれてきました。しかし、昭和40年代以降、生活スタイルの変化により、木材や炭の需要が激減。そのため、森が手入れされることなく、荒廃が進む……。そんな里山共通の問題を解決すべく、あきる野市では5年前から森林レンジャーが常駐しています。

「レンジャーの力を借りて、地域と連携しながら森づくり、環境教育を進めています」
レンジャーのお仕事
さつそく森へと向かいます。ここは古い作業道を整備したハイキングルートです。

「市内の山、すべての尾根と沢を歩き、森や動植物の現状をつぶさに調査しています」
そう話すのは、レンジャーのひとり杉野二郎さん。一年間に1500キロほど山を歩き、データを集積。そうして、森のあちこちに眠る巨木や滝などを見つけ出し、観光資源として光を当てています。

「市内の森は戦後に植樹したスギ、ヒノキが7割です」
一般に、針葉樹の森には動物は棲めないといえます。しかし、その植林も60年を過ぎ

て成長し、森として機能するようになりました。実際に、あきる野の森にも多くの動物たちが暮らしています。

「とはいえ、広葉樹の森に比べると食料が少ないせいか、近年、ツキノワグマなど大型ほ乳類が人家の近くまで出没する例があるのです」
流暢な日本語でそう話すのは、スペイン出身のレンジャー、パプロ・アパリシオさん。手入れのされない森が住宅地の近くまで広がったため、動物と人が鉢合わせしてしまうのです。「手入れをされた里山と、動物たちの暮らす奥山」という関係が壊れ、森と

森で出会った生き物



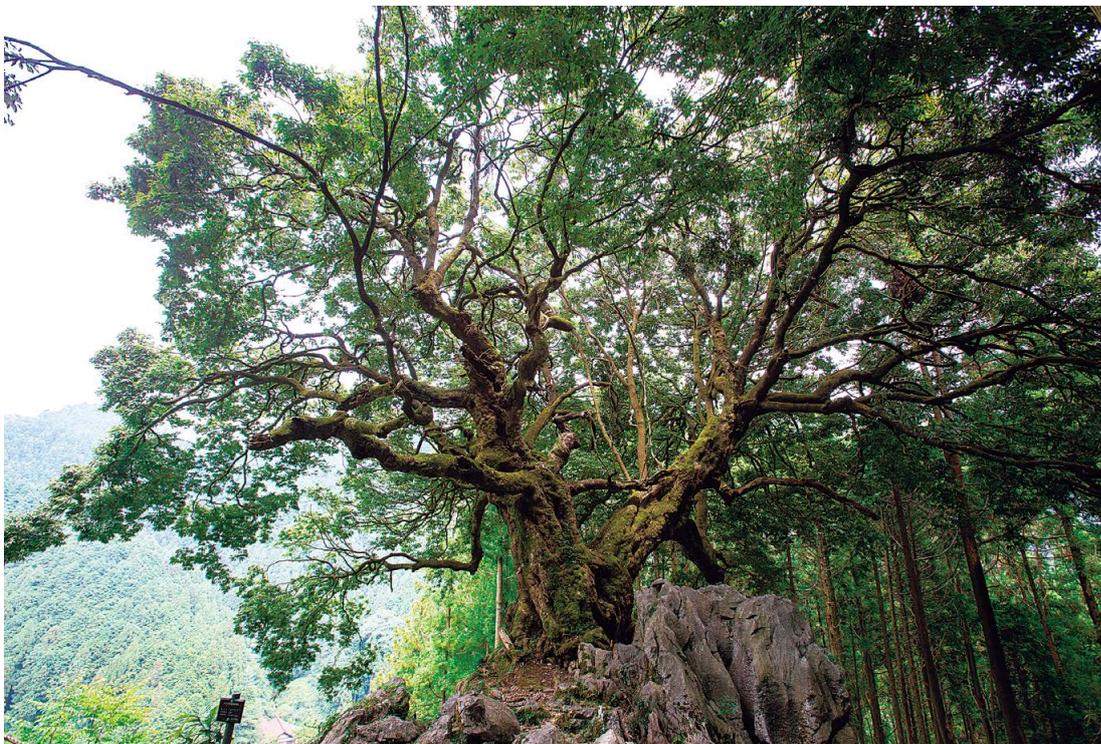
市内の森は、絶滅危惧種・トウキョウサンショウウオの生息地でもあります。あきる野市のキャラクター「森っこサンちゃん」のモチーフ。



こちらも絶滅危惧種のツチガエル。トウキョウサンショウウオとともに、パプロさんのつくったピオトープで繁殖しています。



森の宝石、ルリボシカミキリ。



あきる野の小さな大自然

推定樹齢300歳前後のウラジロガシ。周囲に生えたひこばえと同化して大径木になったそう。綿密な調査により、保存樹木以外の新たな巨木を28本確認。



市内には、森に囲まれた民家も多い。「森の周囲の草を刈り、緩衝地帯をつくらせて、動物との鉢合わせを避けられたら」とパプロさん。

人の関わりが変化してきた今、新しいアプローチが必要なのでしょうか。

「クマが出てくる一因はドングリなんです。2011年はコナラ、ミズナラが大豊作。おかげでクマたちが繁殖し、子育てできたのでしょう」

女性レンジャーの加瀬澤恭子さんは続けます。

「ところが翌年は凶作で、食べる物がなくなり、エサを求めて市街地に出てきたのです」

そこで、豊凶の波の少ない、クリの植樹を考案します。そ

れも地域の方々とともに……。『そうして生まれたのが『森の子コレンジャー』をはじめとしたプログラムです』

まず配慮したのは「自然豊かなあきる野で、日常的にその自然とどう付き合うか」ということ。

「非日常としての野遊び、ではレンジャーになってしまおう。自然にあるおもしろさを伝えるのではなく、動物と人の関わりを日常レベルで考えてほしいと思います」

それは決して動物のためだけではありません。「動物の聖域」をつくり棲み分けることで、地域の方々が安心して森という財産を享受できる。レンジャーとあきる野市はそう考えています。

森のこれから

森の不思議

森の再生を担う、キノコをはじめとした菌類。市内の森では234種が発見されています。写真はクボタホコリの幼菌。



イチヨウ、ヤマザクラ、リュウノヒゲなどの小さな芽……。『タヌキの食べた実の種が糞として出て、発芽したものです。こうして森は生まれ変わります』と加瀬澤さん。タヌキは決まった場所に糞をし(溜め糞)、その匂いなどで家族や仲間と情報交換をし、また、縄張りを主張するそう。

んの森を見て、イメージを持ちたいと思います」

ここでお昼にしましょう。

案内されたのは、推定樹齢300年というウラジロガシの巨木。大きな幹を見上げると、涼しい風が吹き抜ける。

東京にもこんな場所があるんですね。

ふと振り向くと、パプロさんは熱心にクマタカを撮影し、加瀬澤さんは小枝片手にタヌキの糞を分析、杉野さんは菌類を観察中……。自然もさることながら、こんな素敵な大人のいることが、この森の魅力かもしれません。

東京の
緑地・

公園で

みどりに

出会う！

葛飾区

「鳴く虫の女王カンタンを聴く」

虫の音に季節の移ろいを感じ、人の世のはかなさ、もののあわれを重ねるのは日本人独特の感性です。万葉人から平安貴族、江戸庶民へと受け継がれたこの文化は、今も小さな流れをつくっています。東京都葛飾区は、毎年「鳴く虫の女王『カンタン』と秋に鳴く虫を聴く会」を開いています。会場となる「カンタンの里」を訪ね、虫の音を楽しむひとときを体験してきました。

「ルルルルルー」

夜の公園で耳を澄ますと、

近くの草むらから低く虫の音が響いてきました。人によつては「リリリリリリ」とも聴こえるのが「鳴く虫の女王」と称されるカンタンの音だそうです。

この虫の音、間違いなく普段から聴いています！カンタンだと知らないため、聴き過ぎていたのです。虫の音には、知らずに聴き過ぎている、意識していないから聴こえていないものが意外に多

いのかもしれません。

「カンタン」ってどんな虫？

葛飾区は荒川と江戸川に挟まれ、中川や新中川などの水路が巡る土地です。「鳴く虫を聴く会」の当日。朝から河川敷でカンタンを捕まえて準備すると聞き、教えられた場所に足を運ぶと、区の職員とともに数人のボランティアの方が大きな捕虫網を振っていました。

「これがカンタンですよ」

網の中をのぞいて見せられたのは、体長1センチほどの、淡い黄緑色の本当に小さな虫でした。音を出すための羽は



カンタンとの出会い

カンタンは体長1センチほどの小さな虫ですが、鳴くときは意外に大きな音を出します。姿を見るのは初めてなのか、興味深そうに見入っています。

薄く透明です。

捕まえた虫は、展示ケースに入れて参加者に見てもらふとのこと。夜の観察会が楽しみです。

夜の公園で
虫を聴く

午後7時、セミの声やみだんだん暗くなると、会場の



曇り空のもと、河川敷では区の職員とボランティアのみなさんが、カンタンの捕獲をしていました。草むらを撫でるように大きな捕虫網を振ると、カンタンと一緒にバッタやイナゴなどさまざまな虫が網に入ります。

カンタンの里

公園の一角を囲んで、カンタンが定着するように整備しています。刈り取った草をそのまま柵の中に入れてありますが、これはカンタンが卵を産んで、ここに定着するのを助けるためです。



講師の福岡清治郎さん

環境アドバイザーでもある福岡さんは、最後に「自然は未来からの借りもので、できる限り壊さないで、未来の世代に渡せるように、そのためにはどんな暮らし方がいいか考えてほしい」とメッセージをくださいました。

「府中の街でみどりを探そう」

※このマップは、P.4-5「マップづくりで自然を感じる」のウォーキングをもとに作成しました。



玉石の土抱えの道

土抱えに玉石が使われている住宅街の道。
なんだか風情があります。



九鳥林荘の脇の道

雰囲気のある坂道の上ると鳩林荘
の入り口が。近くではお祭りが始ま
るみたいで、子どものはしゃぐ声が聞
こえてきました。



崖線の道

多摩川の流れによってできた「崖線(ハ
ケ)」と呼ばれる崖に沿った道。府中の
特徴のひとつで緑が多く残っています。



見かけた草花
オシロイバナ

東府中駅



見かけた草花
キツネノカミソリ



見かけた草花
蜜を吸う虫に遭遇。
花はノウゼンカズラ。



出会ったネコ

「いききの道」で出会った
ネコ。お地藏様の隣で
静かに座っていました。



出会ったネコ

夕暮れの住宅街を歩いて
いた黒ネコ。パトロール中
だったかな。

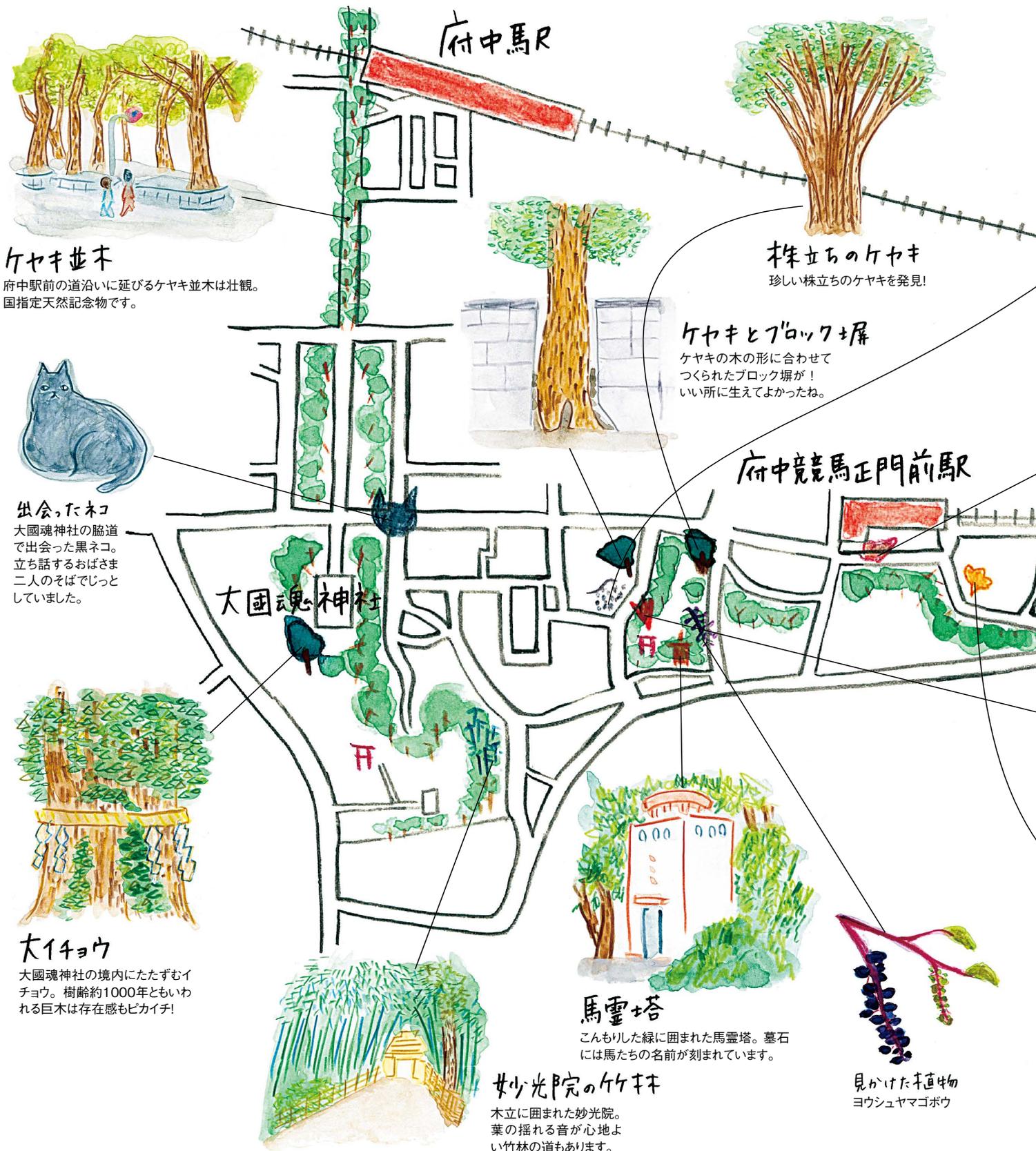


瀧神社の湧水

瀧神社の崖線下にある湧水。府
中崖線に残る貴重な湧水です。

TOKYO みどりマップ ①

街角に「みどり」を見つけると、誰でも嬉しくなるものです。白地図を持って「みどり」を探し歩く楽しさは、ふだんは入り込まないような小さな路地で、意外な光景に出会えることかもしれません。街の歴史や「みどり」の変遷を調べてみたり、そこにある理由や背景を想像してみると、楽しさはさらにふくらみます。今度の週末にでも、あなたの住む街で「みどりマップ」をつくってみませんか？



ケヤキ並木

府中駅前の道沿いに延びるケヤキ並木は壮観。国指定天然記念物です。

株立ちのケヤキ

珍しい株立ちのケヤキを発見！

ケヤキとブロック塀

ケヤキの木の形に合わせてつくられたブロック塀が！いい所に生えてよかったね。



出会ったネコ

大國魂神社の脇道で出会った黒ネコ。立ち話するおばさま二人のそばでじっとしていました。

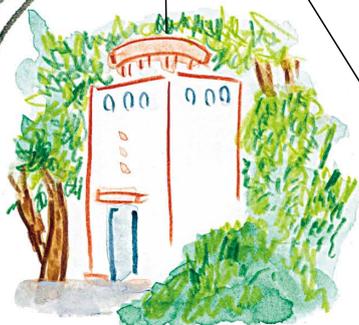
大國魂神社



大イチョウ

大國魂神社の境内にたたずむイチョウ。樹齢約1000年ともいわれる巨木は存在感もピカイチ！

府中競馬正門前駅



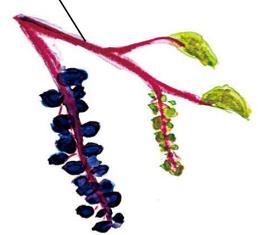
馬霊塔

こんもりした緑に囲まれた馬霊塔。墓石には馬たちの名前が刻まれています。



妙光院のケヤキ

木立に囲まれた妙光院。葉の揺れる音が心地よい竹林の道もあります。



見かけた草植物

ヨウシュヤマゴボウ

の参加。

- 田んぼの1年を見届ける:代掻き、畦塗り、田植え、草取り、収穫、脱穀などの田んぼ仕事の1年を体験。
- グループで畑を始める
- 農園マスターになる:「野菜づくりを人に教えられる」「農園を運営できる」人材育成を目的とした10回程度の講座。

森のようちえん 谷保のそらっこ

〒186-0011 東京都国立市谷保4380-2
☎070-6458-0105
e-mail: yahosora@outlook.com
URL: <https://www.facebook.com/yahosora>

活動内容: 0歳から2歳までの子どもの子育てを応援するために、外遊びを企画、主催している。活動の中心は国立市南部の谷保地域。自然のなかで四季を感じながら遊び、新しい価値を創造することで、心もからだも元気になるという考えのもとに、梅干しづくり、無農薬の畑での野菜づくり、土手や野山での野遊びなど、多彩なプログラムを提供している。

現在、もみ殻や土、すすきを使った自然の家を建てる「もみからハウスプロジェクト」を進めている。



「公園でセミの羽化を観察する」

都立野川公園

〒181-0015 三鷹市大沢6-4-1
野川公園サービスセンター
☎0422-31-6457
<http://musashinoparks.com/kouen/nogawa/>

活動内容: 1980年に開園した都立野川公園は、調布、小金井、三鷹の3市にまたがる約40万ヘクタールの敷地を持ち、多摩川が刻んだ「国分寺崖線」を背景に、崖線から湧き出る水がつくる水辺、雑木林、草原など変化に富む環境のなかで、野草や鳥、昆虫など四季折々に楽しむことができる。

公園では、自然観察会などさまざまなイベントが開催され、人気を博している。園内のサービスセンターや自然観察センターでは、セミ、バッタ、季節の花など約20種類の『レンジャーミニ図鑑』を備え、より深く生き物について学ぶことができるよう、季節に応じて来園者に提供している。

2013年から始まったセミの羽化観察会は、小学生が対象。夜の公園で保護者とともに、神秘的なセミの羽化を楽しむ人気の講座となっている。

「森林レンジャーの里山再生」

森林レンジャー

〒190-0164 東京都あきる野市五日市411
あきる野市環境経済部 環境政策課
☎042-595-1120(直通)
URL: <http://www.city.akiruno.tokyo.jp/0000002691.html>

活動内容: 「森林レンジャーあきる野」とは、あきる野市が取り組んでいる郷土の森づくりをより具体的に進めるための専門集団。

地域の方々の森に対する夢や思いを実現するために、町内会・自治会が行う尾根道や昔道の補修、景観の整備などについて、事前調査から計画立案・作業実施にいたるまで、地域との協働によって実施している。また、市内の登山道や山林地帯を巡視し、整備・補修するとともに、市内に生息・生育する動植物の調査、滝や沢、巨木といった地域資源の掘り起こしなども実施している。さらに、地域の森づくりに関連した自然環境体験イベントやプログラムの開催など、森とその周辺にある地域資源の持つ魅力を市内外のみなさんに向けて発信している。



「鳴く虫の女王カンタンを聴く」

カンタンの里

〒124-8555 東京都葛飾区立石5-13-1
葛飾区環境部環境課自然環境係
☎03-5654-8237 または 03-3695-1111(内線)3522
URL: <http://www.city.katsushika.lg.jp/cgi-bins/event>

活動内容: 葛飾区では、2012年11月に生物多様性地域戦略(生物多様性かつしか戦略)を策定し、区内のさまざまな自然環境や動植物を知り、生物多様性保全について理解を深めることを目的に活動をしている。

2013年度からは、区民との協働を進めるため、区内約50の区民、事業者、地域団体などとともに「葛飾区生物多様性推進協議会」を組織し、「かつしか生きものトランプ」「小さな水田づくり普及啓発パンフレット」を作成。これらを用いた出前授業、水路などを活用した親子向け「生きもの調査体験」などを行っている。

毎年8月末～9月に3回開催する「鳴く虫の女王『カンタン』と秋の鳴く虫を聴く会」では、区内に生息するカンタンの美しい声を聴き、草むらに潜む虫たちの声に耳を傾け、自然に親しむきっかけづくりを行っている。

TOKYO みどり データ便覧 「街中と緑地・公園」

「マップづくりで自然を感じる」

緑のマップ・プロジェクト

〒174-0063 東京都板橋区前野町4-6-1 区立エコポリスセンター3F
板橋区資源環境部 環境戦略担当課 環境協働推進担当係

☎ 03-5970-5656

e-mail: s-kkyodo@city.itabashi.tokyo.jp

URL: http://www.city.itabashi.tokyo.jp/c_kurashi/044/044598.html

活動内容：緑のマップ・プロジェクトに取り組む「いたばしエコ活動推進協議会」は、板橋区で環境に関する活動を行う区民・団体・事業者・学校等・区の協働組織として2012年に設立された。区の環境をより良くしていくため、環境に配慮したまちづくりや環境にやさしい暮らし方の普及などに取り組んでいる。

緑のマップ・プロジェクトの活動は、協議会の5つの部会（2014年10月現在）のひとつである「自然環境部会」の一環。定例の活動日は、毎月第一土曜日の午前中。134に分かれる区内の町丁を1カ所ずつ歩いている。

水と緑のネットワークウォーキングマップ

〒183-0056 東京都府中市寿町1-5 府中駅北第2庁舎
府中市生活環境部環境政策課

☎ 042-335-4315

e-mail: kankyo01@city.fuchu.tokyo.jp

URL: <https://www.city.fuchu.tokyo.jp/kanko/walking/mizutomidoriuxo-kingu.html>

活動内容：大國魂神社をはじめとする歴史的風土を残す社寺林や街道沿いの屋敷林、古きよき里地の姿を残す浅間山、そして多摩川や用水などの水と緑を緑道や遊歩道などでつなぎ、10コースを設定したウォーキングマップ。気軽に自然や歴史などに触れられるように、府中市自然環境調査員（旧・緑の活動推進委員）が現地を調査してコースを選定した。各コースは約7～8キロと手頃な距離で、散歩気分を楽しめる。

市民相談室、市政情報センター、観光情報センター、郷土の森博物館、郷土の森観光物産館などにて1部100円で頒布しているほか、上記ホームページ上からもダウンロード可能。



「丸の内を楽しむエコツアー」

自然環境情報ひろば 丸の内さえずり館

〒100-0006 東京都千代田区有楽町1-12-1 新有楽町ビル1F

☎ 03-3283-3536

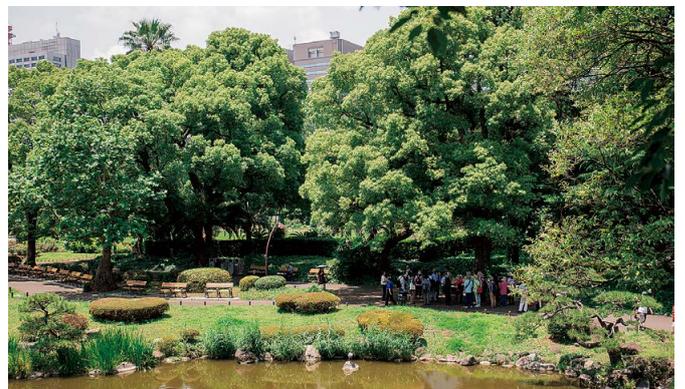
e-mail: saezurikan@m-nature.info

URL: <http://www.m-nature.info/>

活動内容：三菱地所株式会社がCSR活動の一環として「自然保護・環境保全」をテーマに情報発信や啓発を行っている情報施設。

NPO・NGOなどの自然保護団体との協働企画によるパネル展示のほか、イベント・セミナーを通じて、自然に親しみ、学び・考え、体験することにより、環境保全に関心を持ってもらうことを目的としている。

1999年10月、「都会にいながら自然を身近に感じてもらえるスペース」を立ち上げようと、新国際ビル1階に財団法人日本野鳥の会と三菱地所株式会社との共同運営により開館。2005年3月には、「人と自然の共生」をテーマに『Nature Info Plaza 丸の内さえずり館』として新有楽町ビル1階にリニューアルオープンし、それを機に、三菱地所株式会社が社会貢献の一環として直接運営する施設となった。2014年12月には現施設を閉館し、1月からセミナーのみ別途開催へ。



「もっと気軽に農業体験」

くにたちはたけんぼ

〒186-8501 東京都国立市富士見台2-47-1

国立市都市振興部 産業振興課

☎ 042-576-2111 (代表)

e-mail: kunitachinouen@gmail.com

URL: <http://kunitachi-agri.jp/hatakenbo/>

活動内容：国立市の「農業・農地を活かしたまちづくり事業」の一環として、この20年で半減した農地を残すことをめざして開設したモデル農園。運営は、市内の農家・NPO・市民団体・農業生産法人などで構成する「くにたち市民協働型農園の会」（通称＝農園の会）。それぞれの立場から新しい農業の形を模索、「農あるまちくにたち」を子どもたちに受け継いでいくことをめざしている。「はたけんぼ」は、畑+田んぼ+ハケ（崖線）を込めたネーミング。

参加方法は次の4つのスタイルを用意している。

● イベントに参加する：四季折々に開催する農園祭などイベントへ

「TOKYO みどりマガジン」アンケート

*FAX、メール、サイト、郵送にてご送付ください。アンケートをお送りいただいた方の中から抽選で10名様にクオカード1,000円分をプレゼントします。

1) この冊子をどこで受け取りましたか？

- 役所(役場)の窓口
- 都営地下鉄のラック：() 駅
- 都立公園ビジターセンター：() 公園
- その他：()

2) おもしろかった記事、気に入ったページに✓をつけて下さい。(3つまで選択可)

- 表紙
- 巻頭グラフ
- 特集1
- マップづくりで自然を感じる
- 丸の中で楽しむエコツアー
- もっと気軽に農業体験
- 特集2
- 公園でセミの羽化を観察する
- 森林レンジャーの里山再生
- 鳴く虫の女王カンタンを聴く
- 巻末「みどりマップ」

3) 「TOKYOみどりマガジン」の感想とメッセージ(自由にお書きください)

「みどりマップ」を自分でも作ってみませんか? 「わたしのみどりマップ」募集のご案内

自宅や学校、職場の周辺、または都内の公園・緑地を歩いてみて、さまざまな「みどり」と触れ合ってみてください。見つけた「みどり」の要素を白地図に描き込んで、あなただけの「みどりマップ」を描いたら、「TOKYOみどりマガジン編集部」まで、ぜひお送りください。優秀な作品は次号に掲載させていただきます!

●アンケート&マップ送付先
 一般財団法人 環境イノベーション情報機構内
 TOKYOみどりマガジン編集部
 〒105-0013 東京都港区浜松町1-10-11 浜松町OSビル10階
 FAX: 03-6695-1259
 e-mail: tokyomidori@all62.jp
 URL: <http://all62.jp/magazine/enq.html>

オール東京62市区町村共同事業「みどり東京・温暖化防止プロジェクト」

オール東京62市区町村共同事業「みどり東京・温暖化防止プロジェクト」は、東京で暮らす私たちにとって大きな課題である温室効果ガスの削減やみどりの保全について、東京都内の全62市区町村が連携・共同して取り組む事業です。



主催/特別区長会 東京都市長会 東京都町村会 企画運営/公益財団法人特別区協議会 公益財団法人東京市町村自治調査会
 千代田区/中央区/港区/新宿区/文京区/台東区/墨田区/江東区/品川区/目黒区/大田区/世田谷区/渋谷区/中野区/杉並区/豊島区/北区/荒川区/板橋区/練馬区/足立区/葛飾区/江戸川区/八王子市/立川市/武蔵野市/三鷹市/青梅市/府中市/昭島市/調布市/町田市/小金井市/小平市/日野市/東村山市/国分寺市/国立市/福生市/狛江市/東大和市/清瀬市/東久留米市/武蔵村山市/多摩市/稲城市/羽村市/あきる野市/西東京市/瑞穂町/日の出町/檜原村/奥多摩町/大島町/利島村/新島村/神津島村/三宅村/御蔵島村/八丈町/青ヶ島村/小笠原村
 ※この事業は、公益財団法人東京都区市町村振興協会からの助成金により実施しています。

みどり東京・温暖化防止プロジェクト ホームページ <http://all62.jp>